山とスキー

第七十號

大正十二年七月廿七日第三種郵便物認可
昭和二年二月二十八日印刷納本

昭和二年三月一日發行
（毎月一回一日發行）

札幌　山とスキーの會　發行

◇本誌は創刊號より秩父宮殿下の御愛讀を得てをります◇

第七十號目次

記事

登山史上の人々 —エドワード・ウインパー小傳— 大島亮吉 〔一〕
上ボロカメツトク山 井田清 〔一八〕
獨逸スキークラブの練習會 在伯林 麻生武治 〔二一〕
海外通信 木原均 麻生武治 後藤一雄 〔二五〕
彙報抄錄 岡村源太郎 〔1〕

寫眞版

スキーテクニックの研究 直滑降 富良野岳 和辻廣樹

昭和二年三月發行

直　滑　降

登山史上の人々（一）

ヱドワード・ウィンパー小傳

大島亮吉

ヱドワード・ウィンパー Edward Whymper (1 40—1911)

ヱドワード・ウィンパーは、アルプスの登山史上所謂『黄金時代』に於ける最大の登山者の一人で有つたのみならず、洵に登山史上不朽の名を留むる最大の登山者の一人で有らねばならぬ。誰しも彼れ程に登山史上での大なる榮譽を負ふて居る者は無いのである。ウィンパーとマッターホルン——誰れしもアルプスの歴史を繙く者は、如何に此の一人の登山者とそして一個の山体との間に解き結ばれし關係の深きかを知つて驚嘆の聲を發せずには居られぬであらう。

アルピニズムの見地よりして、此のアルプスの初期に於て、如何に彼れがツェルマットの巨峯を征服する迄に、多くの困難に克ち、如何に長い年月の間此の處女峯に勝利の登攀を爲せし迄、度々該峯の登攀を試みて居るかに想到せば、誰れしも亦彼れの其の擔ふ榮譽の當然である事を自ら認めるであらう。

ティンダルも、ケネディも、マシュウスも其の他此の黄金時代の多くの登山者等も、皆ヱドワード・ウィンパーの驚嘆す可き大膽さと、强烈なエナージィに感じさせられ無い者は無かつたのである。然れど又此の登山史上の華かなセルヴァンのドラマの後影には、確かに英國登山者の彼の名高き悲劇的な光輪がめぐらされて在る事も想はねばならぬ。

エドワード・ウィンパーは一八四〇年四月二十七日倫敦に生れた。彼れの父は Joseph Wood Whymper と謂ひ、其の母は Elizabeth Whitworth Claridge と謂つた。エドワードは Clarendon House School にて教育を享けし後は、Lambeth に於て書籍の挿畫畫家と木版下繪師を業とせし彼れが父の手に依りて其の職業を繼ぐ可く仕込まれたのであつた。然しエドワード自身の希望は機械技師と成る事であつた。然ればエドワードは此の職業の技術的方面に對しては餘り熱心も無く父の業を繼承す可く其の業に這入つたのであつたが、然し乍ら甚だ夙き年頃に於て彼れは父の技術的才能を自ら繼承して居ると謂ふ事を示し、又其後同方面の制作の最高位の作品を作ると謂ふ評判を得て、立派に父の職業を繼いで行つた。先づエドワードは父と同じ Lambeth に於て最初斯業を始め、其後安價な寫眞術的方法が發達して木版畫の需要が全然消滅せし一九〇〇年迄は Ludgate Hill に於て尙ほ其の業を繼續して居つたのであつた。又彼れは有名な出版業者 Cassell の下に在つて其の技術部を暫時管理して居た事もあつた。乍然登山者としてのウィンパーの聲名は全然此れ等の事實を蔽ふて仕舞つて居るのである。吾等は唯だ登山者としてのみの彼れを知るのみである。唯だ彼れの畫家たりし事は一八六〇年代より一八七〇年代に於ける登山に關する著書に對して彼れの手に成りし挿畫を殘して居る事に依つてのみ知られるのである。

【註】 ウィンパーの描きし木版畫の挿畫に依りて飾られたる著書は ウィンパー自身の著書たる 'Scrambles amongst the Alps in the Years 1869—9' (1871) の他には John Tyndall's 'Mountaineering in 1891' (1862); Gilbert and Churchill's 'Dolomite Mountains', 1864; Rev. Harry Jones's 'Regular Swiss Round' (1865); Bonney's 'Alpine Regions' (1868); Samuel Manning's 'Swiss Pictures drawn with Pen and Pencil' (1870); F. C. Grove's 'Frosty Caucasus' (1875); H. Smith Stainier's 'Tent Life in Norway' (1876); Schütz Wilson's 'Alpine Ascents and Adventures' (Frontipiece only, 1878); S. H. Nichols' 'Monte Rosa, the Epic of an Alp' (New York, 1886) の如きものを數ふる事が出來る。

以上はウィンパーの登山者としての經歷以外の全部である。登山者としての彼れを傳ふるものには左の如き文獻がある

(1) Alpine Journal, XXVI. pp. 54—8. In Memoriam, by T. G. Bonney (on the scientific side), ibid., pp. 58—61, by T. G. Bonney

(2) Alpina, 1911, pp. 225—8. by Dr. Heinrich Dübi.

(3) Jahrbuch des Schweizer Alpen Klub, Jahrgang X Ⅶ pp. 182—216 by Dr. Heinrich Dübi.

而して次ぎに吾等はウィンパーの登山經歷に移らう。ウィンパーの初めてアルプスを訪ひしは一八六〇年彼れが二十歳の時の事にして爾來一九一一年アルプスの谿谷シャモニィに於て齡七十一歳を以て歿する迄五十年間に亘つてアルプスは彼れの永くは離れ難い地域で在つたのである。以下年代順に彼れの登山經歷を誌す事と爲さう。

一八六〇年　此の年ウィンパーは長き大陸旅行を爲す可く英國を去らんとせし暫く以前に於て、彼の英國山岳會のウィリアム・ロングマン（註）に彼のアルパイン・ジャーナルの前身たる Peaks, Passes, and Glaciers の第二卷の爲めに大なるアルプスの峯（其の中には Mount Pelvox にも含まれて居る。）のスケッチを爲す可く依賴されたのである。

【註】William Longman (1813—1877) は英國山岳會最古の會員にして、一八五八年—六〇年には委員を、一八六一年—三年と一八六九年—七一年には二回副會頭を、一八七二年—四年には會頭を勤めし、山岳會有數の重要な會員にして其の登山經歷を一八五六年の夙きより始め居るも重要なる登山記錄は無いが、彼れは倫敦の高名なる書肆ロングマンス・グリーン・エンド・コムパニイを經營する一人なりし爲め實に多くの登山に關しての著者を出版して居る。又 Mordern Mountaineering and the History of the Alpine Club' (Alpine Journal, vol. Ⅷ) の筆者として知られて居る。

ウィンパーは元來少年時代より極地地方に大なる興味を有して居た。而して今や熱心に彼れは將來に於て英國極地探險隊に參加し得可き資格を得る一助として氷雪に對しての知識を得んとする希望を以て、此の好機會を掴んだのであつた。乍然此のウィンパーの希望は嘗て彼れの生涯を通じて一度と雖も放棄せらるゝ事は無かりしも、又決して實現せられざりしものであつた。然れども此の一八六〇年の彼れが最初のアルプスへの旅行は爾後に於ける彼れが全生涯の大なる轉機なりし事は容易に吾人の以下述ぶる彼れが生涯の記錄に依りても推察し得る所である。斯くて一八六〇年七月二十三日ウィンパーは英國を去つて最初の彼れがアルプス旅行に赴いた。今次ぎに其の行程を略記せば、ラウターブルンネン——カンデルシュテーク（單獨にてカンデルフィルンに長き散歩を爲した。）——ゲンミィ・パス——ザースタール——ツェルマット（一度は單獨にてヘルンリィよりゴルナー氷河に下り、而してリッフェルへ其れを越えた。）——ローン谿谷迄戻る——エギッス

ホルン登山――グリムゼル峠――ブリエンツ――インターラーケン――ベルン――フリブール（ニュウシャーテルとMorat訪問）――マルチニイ――グラン・サン・ベルナール――Bionaz 迄 Valpelline を登り――Col de Valcournera に依りてブルイユへ――單獨にて又其れを越え――クールマユール――コル・ド・フェッレ――テート・ノアール――シャモニイ――デェネヴァ――モン・セニイ――トリイ――九月十六日にクリッソラ――Arbies Col del Colour del Porco 及び Mont Dauphin を越えて（以上に關しては Peaks, Passes, and Glaciers, Ⅱ. ii. p.172; Annuaire de Société des Touristes du Dauphiné, 1900, p. 223; 'Scrambles', p. 43 note 參照）――Vallouise（同地にて同年八月十八日 T. G. Bonney の一行の Mont Pelvoux 登山に同行せる英國登山者 Jean Reynaud に會ふ。）――Col du Lautaret の如きものである。（以上の總べての旅行記はウィンパーの著 'Scrambles amougst the Alps' の第一章と成つて居る。）

一八六一年　此の年より俄然ウィンパーの登山經歷は其の白熱的活動を始めて居る。即ち、八月三日――五日 Val d' Ailefroide に於て露營。而して（八月四日に一度登山を試みしが成功せず）八月六日に於て R. J. S. Macdonald 及び Jean Reynaud と共に Mont Pelvoux の英國人として初登頂を爲した。（同記錄は彼れ自身のスケッチ三葉を添えて、Peaks, Passes, and Glaciers, Ⅱ. ii. p. 223 に掲載せられ、後其の一部分は該スケッチ三葉の中一葉と共に 'Scrambles' に再錄せられた。）――八月十三日 Col del Colour del Porco に登りて、Guil 谿谷より Monte Viso に達せんと試みた。――八月十四日 St. Véran 迄――八月十五日 Col d' Izonard（'Scrambles' 第二章參照）――八月十六日モン・セニイ峠を越えた。（ウィンパーは、彼れの著 'Scrambles' の第三章に於て其の當時堀鑿中なりしモン・セニイ隧道に關して長く叙して居る。）――八月二十八日ブルイユに達し――八月二十九日、三十日に亘りてマッターホルンに對してのウィンパーが第一回の登山を試み一二、六五〇呎の高點迄到達した。（'Scrambles' 第四章參照）

一八六二年　七月五日ブルイユに到り――七月七日八日と並びに七月九日十日の兩回に亘りて R. J. S. Macdonald と共にマッターホルンの第二回及び第三回の登山を試みた。――七月十一日より十六日迄はモンテ・ローザを登りてツェルマット

へ――七月十八日、十九日單獨にてマッターホルンへ、第四回目の登山を試みて、是迄達せられし最高點たる一三、四〇〇呎の高點迄到りしが、下降に際し墜落負傷した。――七月二十三日、二十四日第五回のマッターホルン登山（一三四六〇呎迄達す）（'Scrambles' 第五章參照）（註）

【註】ウィンパーの此の第五回目のマッターホルン試登の直後たる七月二十七日、二十八日に於てティンダルは彼れの氣に入りの案内者ローヌ谿谷のヨハン・ヨゼフ・ペンネンと、アントン・ツルターの他、伊太利ヴァル・トゥールナンシュのジャン・アントアーヌ・カッレル及びセザール・カッレル他一名を伴ひて彼れが第二回のマッターホルンの登山を試み、其時迄達せられたる最高點にして、今日ピック・ティンダル（一三九七〇呎）として知られて居るマッターホルンの肩或ひは南西の隆起に達した。ティンダルの此の時の登山の失敗は彼れがペンネンを Head guide として、カッレルを唯だ Porter としてしか使はなかつたが故に、カッレルはマッターホルンに登頂し得る可能性ありしにも拘はらず、其れを敢えて爲さなかつたのである。何故ならばカッレルはマッターホルンの伊太利人に依つてのみ初登頂されなければならぬと謂ふ信念を有して居たからである。ティンダルは此の時の記文を一八六三年八月八日發行の 'Saturday Reivew' に掲載し、其後該記文は一八七一年に於て彼れの著 'Hours of Exercise' 第十四章に再錄せられた。其れと殆んど同時にウィンパーは彼れの著 'Scrambles', pp. 126—9, 133—5. に於てティンダルの該登山に對してのジャン・アントアーヌ・カッレルの其他からの話を間接に掲げたので、其處に於てティンダルとウィンパーの間に爭論を惹起した。即ちティンダルは彼れの該著第二版一六六—七頁に於てカッレルの背任的行爲を非難したのであつたが、其れに對してウィンパーはカッレルを辯護して反駁の一文をアルパイン・ジャーナル第五卷三二九—三三五頁に掲載したからであつた。

一八六三年　七月三十一日ブルイユに達した。――八月二日 Cimes Blanches ――八月三日 Breuil joch 或ひは West. Fuggenjoch――八月四日 Col de Valpelline――八月六日 ダン・デランの登頂を試む。――八月七日 Cols de Valcournera and de Feuôtre を越えて完全にマッターホルンの周圍を歩いた。――八月八日 Grand Tournalin を北西稜よりの新登頂。（'Scrambles' 第六章參照）――八月十日、十一日マッターホルンの第六回登山を試む。（'Scrambles' 第七章參照）（ウィンパーは歸英後アルパイン・クラブに於てマッターホルンの周圍を登れる彼れが經驗よりして 'Camping-out' に就ての一文を讀んだ。）

5

一八六四年　六月二十一日 A. W. Moore 及び Horace Walker と共に、案内者クリスチアン・アルマー、ミッシェル・クロッツを伴ひて Col des Aiguilles d' Arve の初通過——六月二十二日 Aiguilles de la Sausse の南峯の初登頂——六月二十三日ブレーシェ・ド・ラ・メージェの初通過——六月二十五日 Col des Écrins の第二通過及び Barre des Écrins の初登頂（ウィンパーは此の登山に關してアルパイン・クラブにて記文を讀んだ。同記文はアルパイン・ジャーナル第二號二二五頁以下に掲載せられ、後又 'Scrambles' 第九章に彼れ自身の手に成りしスケッチを挿入して再錄された。）——六月二十七日 Col de la Pilatte の初通過——六月二十八日より七月二日迄 Cols du Galibier, des Encombres, du Bonhomme を越えてシャモニイ（'Scrambles' chap. VIII—X; Moore's 'The Alps in 1864' pp. 1—122, 154—6参照）

七月六日 A. A. Reilly と共に Aiguille d' Argentière の登山を試みた。（ムーアはコル・ダルジャンティエール迄彼れ等と同行し峠を越した。）（Moore's 'The Alps in 1864', pp. 156—66 参照）——七月八日 Col de Triolet の初通過——七月九日 Mont Dolent の初登頂——七月十二日 Aiguille de Tréletête の初登頂——七月十三日 Col du Mont Tondu——七月十五日エギィーユ・ダルジャンティエールの初登頂（アルパイン・ジャーナル第一號三七四—五頁並びに同誌第二號九七—一〇九頁及び 'Scrambles' 第十一章参照）——七月十六日十七日ツィーナルと Alp Arpitetta へ——七月十八日ムーア、ウォーカーと共にモーミング・パスの初通過（A. J. I 376; II 191; XXX II 65; Moore's 'The Alps in 1864', pp. 200—82; 'Scrambles', chap. XII 参照）——斯くてウィンパーはツェルマットに於てレーリィと會合してマッターホルンに登らん計劃なりしも、其後急據歸英す可き餘儀無き事情の爲め、其れは果され無かつた。

一八六五年　六月十三日 W. H. Hawker と共に Ebneflulijoch に登らんとし、其の最後の氷の斜面に達せし時、夜の來る以前にファウルベルクに歸らんとする時間無き爲めと氷の上に夜を明す可き準備無かりし爲め同地點より引返した。此の登山の所要時間は十九時間であつた。（A. J. III 83; XXX. 300; 'Scrambles', p. 206 参照）——六月十四日 Petersgrat——六月十五日 Zmeiden pass——七月十六日 Grand Cornier の初登頂——六月十七日ダン・ブランシュの第三登頂（A. J.

XXXII. p. 209; 'Scram bles' chap. XIV 參照)——六月十八日コル・デランに於て迷ひ——六月十九日コル・デランを越えた。(v.J.XXXII. p. 58 參照)——六月二十日テオドゥル峠及びテオドゥルホルン——六月二十一日マッターホルンの第七回試登(南東側より)——六月二十三日 Monte Saxe ——六月二十四日 Grandes Jorasses の西頂の初登頂 (A. J.ii. p. 131; 'Scram bles', chap. XVI; 及びアルイュ七月九日附伊太利山岳會名譽書記宛書翰。右は C. A. I. Boll., I. no. 1, p. 10 に掲載せられてある。參照)——六月二十六日 Col Dolent の初通過 (A. J. i. p. 131; 'Scrambles', chap. X. VII. 參照) ——六月二十九日エギィーユ・ヴェルトの初登頂をツェルマットの名案内者フランツ・ビーナーを伴ひて爲した。(A. J. ii. p. 131; 'Scrambles', chap. XVII; paper in 'The Leisure Hour', Auy. 1863 參照)——七月二日 Col de Talèfre の初通過 (A. J. ii. p. 132; C. A. I. Boll., i. no. 2, p. 13; 'Scrambles', chap. XIX. 參照)——七月五日 Col de Fenêtre ——七月六日 Ruinette の初登頂、Portons pass, Col d' Oren の初通過 (A. J. ii. p. 131 參照) ——七月七日 Col de Valcournera ——七月九日 Châtillon 迄行きて又戻る。——七月十二日 Lord Francis Douglas と共にテオドゥル峠を越えてツェルマットへ行つた。('Scrambles', chap. XX 參照) 斯くて、此れ等の登山を爲してから、即ちエギィーユ・ヴェルトの登山後十五日に於て、六年間彼れの撓まず包圍して居たマッターホルンを征服したのである。強情な執拗さと驚く可き六年間！ 此の偉大な山体との火の如き接戰。そして其の光榮ある勝利と其れに續いて起つた歸途の下降に於ける悲劇は幾多の登山史の記者が最も愉快に、又華々しく語らんとする所であるが故に誰れも知つて居る筈である。然れどマッターホルンが、彼れに依つて、及び其の當時の他の多くの登山者に依つて、如何に度々試みられて居たかを知る者は、多くは無いであらう。此處に其のマッターホルン初登攀の前に企てられた登攀の數々をウィインバーの記する所に依りて表示するならば次ぎの如くである。

(Edward Whymper: Escalades dans les Alpes de 1860 à 1869 Nouvelle édition 1922 の附錄第二表に依る。

7

順序	年月日	姓名	登攀した山側	最高點	摘要
1	一八五八—九年	J.-Antoine Carrel. J.-Jacques Carrel. Victor Carrel. Gob. Maquignaz. Abbé Gorret.	Breuil "Cheminée"	三八五五m	此の以前に企てられた數多の登攀に於ても此の高點迄達して居た。
2	一八六〇年七月	Alfred Parker Charles Parker Sandbach Parker	ツェルマット	三四七三m?	案内者無し。
3	一八六〇年八月	V. Howkins J. Tyndall	ブルイユ、ホウキンスはGrande Tour Tyndallより五、六米突上まで到達した。		案内者 J.-J. Bennen J.-Jacques Carrel
4	一八六一年七月	MM. Parker	ツェルマット	三五六六m	案内者無し
5	一八六一年八月廿九日	J.-Antoine Carrel J.-Jacques Carrel	ブルイユ "Crête du Coq"	四〇三二m	
6	一八六一年八月二十九—三十日	Edward Whymper	Breuil "Cheminée"	三八五五m	ペルナー・オーバーランドの一案内者と共に山上にて露營
7	一八六二年一月	T. S. Kennedy	ツェルマット	三三五三m?	冬季に於て企られた最初の登攀
8	一八六二年七月七—八日	R. J. S. Macdonald Edward Whymper	ブルイユ『シュミィネ』の下のアレート	三六五七m	案内者 Johann Zum Taugwald. Johann Kronig

9	一八六二年七月九—十日	R. J. S. Macdonald Edward Whymper	ブルイヨ „Grande Tour"		案内者 J.-A. Carrel と Pession
10	一八六二年七月十八—十九日	Edward Whymper	ブルイヨ „Cravate" のパーティよりも少し上迄達す	四〇八四m	單身
11	一八六二年七月二十三—二十四日	Edward Whymnder	ブルイヨ „Crête du Coq"	四〇〇八m	案内者 J. A-Carrel. César Carrel Luc Meynet
12	一八六二年七月二十五—二十六日	Edward Whymper	ブルイヨ „Cravate" の頂と殆んど同じ高さ迄	四一〇二m	Luc Meynet のみを伴れて
13	一八六二年七月二十七—二十八日	John Tyndall	ブルイヨ最後の峯の下の『肩』	四二五八m	案内者 J.-J. Bennon, Anton Walter. 人夫 J.-Antoine Carrel, César Carrel と他一人
14	一八六三年八月十日—十一日	Edward Whymper	ブルイヨ „Crête du Coq"	四〇四七m	案内者 J.-A. Carrel, César Carrel, Luc Meynet 及人夫二人
15	一八六五年六月廿一日	Edward Whymper	南東側	三四一四m	案内者 Michel Croz, Christian Almer, Franz Biener 人夫 Luc Meynet.

所謂登山史上の『黄金時代』と謂はれた一八五九年より一八六五年に到る間の華々しい山頂征服の歴史は、實に此の一八六五年夏のマッターホルンの初登頂に依つて段落を告げた事に成つたのである。登山史家クーリッヂは言ふ。『一八五八年以來最も完成された多くの登山者のプロフェッシナルもアマチャーも含んでの不斷不屈の努力を斷然斥けて居た、此の傲岸な峯も一八六五年七月十四日に於て、其の時迄確實に試みられず、又豫期以上容易で有つた登路より登られて、此處に

始めてマッターホルンの山頂は人間の足下に踏まれし事と爲つたのであつた。然し既に好く誰れも知る如く、其の歸途の下降に於て、恐る可きアクシデントは起り、四人の者は墜死し、殘る三人（ウィンパー當時二十五歳ミ、ツェルマットのガイド、ペーター・タウクワルダー父子當時父は四十五歳 Peter Taugwalder père, et Peer Taugwalder fils）は、パーティの二つの區分の間のロープの斷れた事に依つて救はれた。そして勝利に續く其の瞬間の悲劇に死せる四人の者は、有名な當時の登山者たりしチャレース・ハドソン（Rev. Charles Hudson 當時三十八歳）及び當時に於ての熟練な登山者であつたロード・フランシス・ドグラス（Lord Francis Douglas. 當時十九歳にてハドウより僅か年長であつた。）始めてのアルプスのシーズンを其の時送つた青年のハドウ（D. Hadow 當時十九歳）並びに當時に於ての第一流案内者の一人であつた有名なシャモニイのミッシェル・クロッツ（Michel Croz. 當時三十五歳）とであつた。

此のマッターホルンのカタストローフは、一八六五年の夏の初め、即ち登山のシーズンの始めの方である可き時日に惹起したのにも拘はらず、其の影響は其の年のシーズンが閉じられて仕舞ふ迄は現れなかつた。然れど、其れ以後の影響は極めて甚大であつて、登山と謂ふものも其の爲めには全く永久に失はれて仕舞ふかとも一時は思はれた程に、登山史上に其の悲劇直後の一八六六年より一八七〇年迄を『暗黑時代』(Dark period)と云ふ程の一時代を創つた程に、其の影響は深く大きく、そして長かつたのである。其の時以前には其んなに多くの生命が、一度に高峯に於て失はれた事は無かつたのである。其の時以前には英國貴族の生涯が其んな悲劇的に終つた事は無かつたのである。其の時以前にはアルプスに於て山頂登攀の勝利が斯くの如くに速かに死に依つて附き隨はれた事は無かつたのである。其れは登山史上で最もドラマチックな年に於ての最もドラマチックな出來事であつた。』と。(Coolidge, The Alps in Nature and History. pp. 287-288)

此れ等マッターホルンの初登頂に就いての全く自然に造り出だされた劇的な物語を讀む時は、譬へ何等の登山に興味を有せぬ者と雖も、又異常な興味を以つて其れを讀了せずば止まないものがあらう。又此れ程種々の人々の手に依つて、通俗的に、物語的に、或ひは專門的に書かれたものは無いであらう。そして其れには常に此のエドワード・ウィンパーの名は

不可離的に爲つて居る。恐らくマッターホルンの名の存する限りは、ウィンパーの名も存するであらう。共に初登頂を爲し彼れよりは當時に於て先輩であり、又最も卓越して居た登山者の一人であつたチャーレス・ハドソンの名も、當時第一流の聲名を得たガイド・クロッツの名も、或ひは彼れと競つて彼れよりもより早く登攀を企て、より困難な伊太利側の登路を登つて僅かに彼れの初登攀の日より遲るゝ三日に過ぎなかつた。彼のジャン・アントアーヌ・カッレルの名も、皆ウィンパーの光ある名の下に陰影と爲つて仕舞つて居る。此の點に於てウィンパーは洵に運命の寵兒の如く思はれるけれど、又より仔細に彼れのマッターホルンに對して爲した不撓なる努力と其の熱情とを思ふ時、彼れに與へられた其の名譽も實に正しきものである事を吾等は知るのである。

筆者は此處に此のウィンパーのマッターホルン初登頂の興味深き登山史の劇的光景を詳細に叙したものを又其儘移植するの必要は無いものと思惟するも、此のマッターホルンの初登頂に關して其れを全然略筆するはウィンパーの傳記——譬へ其れが小傳に過ぎざるも——としては甚だ色彩を殺ぐ事と思ふ故、極めて簡單に同峯初登頂並びに其の災禍に關してのウィンパー自身の筆になる章句の引用に依りて其の大要を誌したいと思ふ。

凡そマッターホルンの初登頂が登山史に於て有名なる事には種々の理由がある。其の山岳の峻險にして好く登山者を近付けしめざりし事もあり、又其れを取り圍みし多くの登山者の勇壯にして不撓の努力もあり、殊に其の初登頂に關しての伊英の競爭あり、英人登山者同志の競爭もあり、更らに又其の初登頂の直後、即ち他の多くのアルプスに於ける災禍と異なりて華々しき勝利の瞬間に又其れに比す可き最も悲慘なる悲劇が惹起せし等、極めて豊富なる物語的事實を包有する事あると同時に、更に又純然たる登山史的見地より觀ては、既に述べし如くアルプス山頂の征服の一時期を劃する一轉期を形成せるが故である。然れば以上の諸理由に依りてマッターホルンの初登頂は登山史上最大の事件として登山史上に記錄せらるゝのである。然して此處に其の大要乍らマッターホルンの初登頂を記するには勢ひ其の前後の事情をも併記するの必要がある。一八六五年以前に於けるマッターホルンの初登頂を爲さんとせし、其の登頂に絡まる登山者の人名其登山記

錄は既に示せし所である。然して一八六五年なる其の年に於ては、マッターホルンの絶頂に最初に其の足を置く可き大なる榮譽を得んとせし競爭者は先づ三人を數ふる事が出來る。即ち彼のジョン・ティインダル教授と、伊太利のフェリーチェ・ジオルダノ（Felsie Giordans）そして我がエドワード・ウィンパーである。而して伊太利側のジオルダノがマッターホルンの初登頂に關して、ウィンパーに對して爲せし詭謀術策の詳細は彼の高名なる伊太利の登山者にしてマッターホルン研究の權威たるギドオ・レイが一九〇五年に名著Cervinoを上梓して、同著中に其の悉皆を記せしが最初に一般登山者迄に知られし所であると謂ふ。

伊太利側のジオルダノの術策はウィンパーから案内者のカーレルを奪つて仕舞ふ事であつた。カーレルは此の當時に於て最もマッターホルンの伊太利側の事情に精しく、且つ彼れが故國の名譽の爲めと云ふ愛國的心情より伊太利人に非ざればマッターホルンの絶頂を踏ましめぬと言ふ考へを抱いて居たのであつた。其故實際又カーレルもウィンパーからは背いて彼れと行動を共にしなかつた。此處に於てウィンパーは運命の神秘が無ければ明らかに敗北したかも知れないのであつた憤怒と失望の中にウィンパーはブルイユから七月十一日ツェルマットへとテオドゥールを越えて去つた。ツェルマットに於て、ウィンパーは果らずも其の直前ガーベルホルンの初登頂をツィーナルより爲せし溌溂たる青年登山者ロード・フランシス・ダーグスに會遇し、彼れの伴れし案内者タウクワルダーが恰もマッターホルンのヘルンリイ・リッヂを探索して、其れが恐らく可能ならんと謂ふ良き報知を齎らしたのであつた。其處に於て當然の結果としてウィンパーとロード・フランシスと共にマッターホルンを登らんと決心したのであつた。其處へ又英國登山者の一行がツェルマットに現はれた。其れはリンコルンシャイヤーはスキリントンの牧師にして、其の當時に於ての第一流の登山者たりし彼のチャーレス・ハドソンと彼れに依りて始めて其年アルプスに登りたるハロウ出身の若きダーグラス・ロバート・ハドウであつた。而して彼れ等の案内者はウィンパーが古き友たる彼のミッシェル・クロッツであつた。ハドソンのパァティはホテルに於て翌日マッターホルンに向けて出發する事をウィンパー等に告げたので、ウィンパーとロード・フランシスとは協議して、同時に二つの獨立せるパァティがマッタ

ーホルンの如き山岳を登るのは望ましからざる事であると思ひ、斯くて此の二つのパティは協力して登山する事に成りてパティは餘り多人數と爲つた。此の如き多人數は特にマッターホルンの如き峻嶮な山岳を最初に登らんとする際に對しては如何にしても避く可き性質のものであつた。然し其れは兎に角成功したのであつた。

即ちウィンパーの一行は七月十三日午前五時半にツェルマットを出發した。天氣は雲一つ無き好晴であつた。彼れ等は緩々と登つた。そして約午前十一時半に實際の峯麓に到り、實際にマッターホルンの東側を眺めてリッフェルから望見する時は全然登攀不可能の如くに望まれし峻嶮なる山側が、馳け登れる程に容易なのに驚愕したのであつた。正午頃彼れ等は約一一〇〇〇呎の高距の地點に天幕を張るに適せる場所を見付けた。クロッツと若きペーター・タウクワルダーとは前途を探索に行つたが、午後三時頃兩人は非常に亢奮した狀態で戻つて來て、前途には少しも困難無き事を告げたのであつた。翌朝夜明前に彼れ等は出發した。マッターホルン東側の大山側が今や其の全姿を現はして、其れは高さ三千呎の自然の階段の如くに聳立して居た。多少一部分は容易でもなかつたが、然し彼れ等は決して如何なる困難にも妨げられて休止する樣な事は無かつた。登路の大部分は決してロープを必要としないものであつた。斯くて彼れ等は頂上直下約五〇〇呎の今日「肩」と呼ばれる雪稜に達せし時、北側に移つた。其の側は東側よりは困難ではあつたが、ウィンパーの記する所に依ると四十度以上の斜面は何處にも無かつた。そしてマッターホルンは彼れ等のものとなつた。次ぎにウィンパーが自ら彼れの著書に於て其のマッターホルンの絶頂に立ちし瞬間を叙せしものを引用して見るならば、

『扨て諸君等は既に七月十一日に七名の伊太利人がブルイユを出發して居ると云ふ事に想ひを返して呉れねばならない彼れ等が出發してからは四日間は經つた。そして私等は既に彼れ等が私等より以前に頂上に達して仕舞つて居やしないかと云ふ不安に苦しめられた。登つて行く間中私等は其の事に就て話し合つた。そして『頂上に人が居る！』と云ふ誤つた警報が屢々繰返された。高く登つて行く程、又私等も奮激を激げしくした。最後の瞬間に若しも私等が敗れたならば何うだらうか？ スロープは緩く爲つた。終ひに私等はロープを解く事が出來た。クロッツと私とは抜きつ抜かれつ

の競爭で、先を爭ひつゝ馳け登つた。午後一時四十分に世界は私等の足下と爲つた。マッターホルンは征服された。萬歲！　其處に足痕は無かつた。

然れど未だ私等が勝つたと言ふ事は確かでは無かつた。マッターホルンの頂上は約三百五十呎の長さのある。大略水平なリッヂと爲つて居た。そして伊太利人は其の頂上の一端に登つて居るかも知れないのである。私は左右の雪を熱心に注視し乍ら、其の頂上の南端へと急いだ。再び、萬歲！　其處も未だ足痕はなかつた。彼れ等は何處に居たのか？半ば疑ひ、半ば豫期し乍ら私は絕壁を覗き下した。そして直ちに遙か非常な距離の下のリッヂに單なる點々と爲つて居る彼れ等を見付けた。私は帽子と腕とを高く差し上げた。『クロッツ！　クロッツ！　此處へ來い！』『奴等は何處に居ますか？』『彼處に、あれが見えないかい？　彼處の下に！』『あゝ！　奴等は下の方に居る！』『クロッツ、私等が此處に居る事を奴等に敎へてやらう！』私等は聲が嗄れて仕舞う迄叫んだ。確かめる事は出來なかつたが、伊太利人等は私を認めたらしかつた。『クロッツ、奴等に私等の此處に居る事を知らしてやらなければならない。奴等も私等の此處に居る事を知らなければならないんだ。』私は岩片を摑んで投げ落した。そして、又他の同行者もそうする樣にと、私は彼れ等の名を呼んだ。私等は岩片や杖を投げ落した。すると忽ち岩の急流が斷崖を流れ下り始めた。時機は當を得て居た。伊太利人は逃げ下りて仕舞つた。

私は此の伊太利のパーティのリーダーたるカッレルが此の時に於ても尙其處に留まつて居る事が出來たとは思へない何故ならば私等の勝利の叫聲は、彼れをして彼れの生涯での望みを全く絕望たらしめて仕舞つて居るからである。彼れこそ、マッターホルンの初登攀を試みた者の中で、最も其の頂上に最初に達する事を熱烈に希つたものである。マッターホルンの不可登なる事を最初に疑つたのも彼れであつた。そして彼れこそ其の登攀の可能である事を信じて、其れを主張した唯一人であつた。伊太利側より彼れの故鄕の谿の名譽の爲めに、マッターホルンを登る事は、彼れの生涯の目的であつた。一度は彼れは其の手中に其れを握らうとした。彼れは彼れの最上を盡したと思つた程に振舞つた。然れど彼れ

は唯だ一度虚戯的行爲を爲したので、其れを失つたのだ。

他の人達も其處へやつて來たので、私等はリッヂの北端に歸つた。クロッツはテントの支柱を取つて、其れを最も高い雪の上に立てた。『宜しい、旗桿は其れでいゝが、旗は何處に在るか？』と私等は言つた。『其れは此處にあります』とクロッツは答へて、彼れの上衣（ブルーズ）を脱いで、其れを支柱の先端に縛り付けた。其れは貧弱な旗だつた。そして其の旗を飜す程の風も無かつたけれど、然も其れは總べて四周から見る事が出來た。ツェルマットでも、リッフルでも、ヴァル・トゥールナンシュでも、其れは見えたそうだ。ブルイユでは見張の者が『勝利は我々のものだ！』と大聲を擧げた。ブルイユの人々はカッレルに對し、伊太利に對して『萬歳！　萬歳！』を叫んで、急いで祝祭を爲した。翌日に爲つて、誤報を知つた。總べての事は變つて居た。登山者等は歸つて來た。――悲しんで、落膽して、氣を挫かれて、望みを失つて、そして陰鬱と爲つて。

其の人達は恁う人々に言つた。『我々は確かに鬼共を見ました。奴等は我々に石を投げ付けました。傳説は眞實です。マッターホルンの頂上には精靈が居ます。』（Scrambles amougst the Alps. Chap. X Ⅶ.）

斯くてマッターホルンは豫期せざる程驚く可き容易さを以て征服された。彼れ等は山頂に一時間止まつたのである。ウィンパーを除いての此れ等六人の者は、何等重大な困難も無く登山史上に於ける最大の勝利を克ち得たのであつた。然してウィンパーに取りて、此の山頂の一時間は　過去六年間に亘り附き纏はりたる勞苦の終結たる此の一時間は、洵に彼れの生涯での最高調時であらねばならぬ。斯くて彼れ等は降る用意を爲した。其の下降の順序は甚だ奇妙なものであつた。一行中の最上の者たるクロッツは最後の地位を占めねばならぬのに、事實歴史の傳ふる所に依れば彼れは先頭に在つた。そして其れに次いで、ハドウ、ハドソン、ダーグラス、老ペーター、タウクワルダー、ウィンパーで、最後の重大な地位は若き未經驗な案内者のペーター・タウクワルダーであつた。然し乍ら勝利に眩惑して彼れ等の誰れもは此の事を考へる餘地は無かつた。斯くて奇蹟的に容易に總べての事は捗つたが、然し斯くの如き幸運は又簡單に變り易いものである。即ち

斯くて此の登山史最大の光輝ある山頂征服の勝利は、又登山史上最大の悲慘な災禍に依つて其の物語が一層色濃く續けられたのであつた。次ぎに又ウィンパーが其の災禍に就きて記する所に從つて述べるならば、

『數分間の後であつた。ツェルマットで遠眼の効く一人の少年が、モンテ・ローザ・ホテルに馳け込んで來て、主人のザイラーに、マッターホルンの頂上からマッターホルングレッチャーに雪崩が落ちたのを見たと云ふ事を告げた。然れども其の少年はたはいもない話をすると云つて叱られた。然し乍ら其の少年の言ふ事は正しかつたのだ。此のアクレデントが、即ち其の少年の雪崩と見た所のもので有つたのだ。

ミッシェル・クロッツは彼れのアックスを傍に置いて、ハドウ氏がもつと確實に下りられる樣に、いちいちハドウ氏の足の置くべき場所、手を掛ける個所と、其の適當の場所を手を取つて教へてやつた。私の知る限りに於ては、誰れも其の時現に下りつゝは居なかつた。私には確かな事は云へない。何故ならば二人の先頭の者は、私と其の人達の居る間に介在した岩塊の爲めに一部分隱れて居て見えなかつたからだ。然れど以下は私の信ずる事である。――先頭二人の肩の動き具合からして察するのに、クロッツは私が今言つた樣にハドウ氏の面倒を見乍ら、今度は自分が一歩か二歩下りる爲めに、下に向つて身体を廻した。其の瞬間ハドウ氏が滑つて、クロッツの上に倒れて、クロッツを打ち倒したのだつた。同時に私はクロッツの驚きの叫ぶを一聲聞いた。そしてクロッツとハドウ氏とが飛ぶ樣に下へ落ちて行くのを見た。其の次ぎの瞬間ハドソンは其の足場の上から曳き下され、續いて直ぐにロード・エフ・ドグラスが又ハドソンの後に次いて曳き落されて行つた。總べて此の事は一瞬間の出來事だつた。直ぐに私達はクロッツの叫び聲を聞いた。老ペーターと私とは岩のやうにしつかりと頑張つた。ロープは此の二人の間で緊く張り切つた。そしてぐんと云ふ手答へは此の二人には全るで一人の者であつた樣に來た。二人は確保し得た。然れどロープはタウグワルダーとロードフランシス・ドクラスとの中間で斷れた。二三秒の後私達は私達の不幸な同行者等が、背を下に、兩手を擴げて、何うかして助かろうと努力し乍ら、下へ滑り落ちて行くのを見た。其の人達は一人宛傷も受けず、見えなくなつて、高さに於て殆んど四〇〇〇呎

もある、直下のマッターホルングレッチャー迄、斷崖から斷崖をミ落ちて行つたのであつた。ロープの斷れた瞬間に於て其の人達を救ふ事は全然不可能な事であつた。

斯くて私等の友等は死んだ！　約半時間の間私等は其の地點から一歩さへも動く事なくぢつとして居た。二人の者は恐怖の爲めに全く無力の狀態と爲り、幼兒の如くに泣き叫び、死したる人々の如き運命に又自分等も逢着するかの如くに戰き慄えて居た。老ペーターは唯だ「シャモニィ、嗚呼シャモニィは何んと言ふだらう？」と云ふ言葉許を無暗と發して居た。其の言葉の意味はクロッツの如き立派な者が墜落したとは何人が信じやうと言ふ事であつたのだ。若者は何事も爲さず、唯だ"We are lost! we are lost"と叫んでは泣きぢやくつて居つた。此の二人の間に挾まれて私は上へ動く事も降る事も出來なかつた。私は若いペーターに何うか降りて呉れと賴んでみたが、然し彼は敢えてさう爲そうともしなかつた。彼れが先に降りなければ、私等は降る事は出來ないのだ。すると老ペーターも又危險に對して怖れ始め、同じ樣な言葉を聲高く叫んだ。父親の恐怖は無理もなかつた——　彼は息子の爲めに戰慄したのだ。然し若者の恐怖は臆病からだつた——彼れは自分だけの事しか考へなかつたのだつた。終ひに老ペーターは勇氣を振ひ起して、ロープを確保出來る岩へ迄彼れの場所を變えたので、若者は降り出した。そして私等は共に立ち上つた。そうして直ちに私は斷れたロープを調べて見て、驚愕した——實際怖る可き事には——其のロープは三本の中で最も弱いロープであつた。其れは古いロープであつた。其れは岩壁に於て捨繩をする時の準備として持つて來たものであつた。其のロープは空中にて切斷して、少しもそれ以前に擦り切れて居た樣には見えなかつた。(ibid.ch ap. XIII.)

（未　完）

上ポロカメツトク山

井田　清

十勝。それは私達に雪と山の懐しい響きだ。春から夏へ、秋から冬へと十勝はいつも私達の樂しい山の思ひ出をつないで居て呉れる。そしてブッシュの夏が過ぎ眞白な冬がやつて來ると共に、私達の心の奥で十勝といふ聲は強い〳〵響きを傳へ始る。ほんとに朗らかな山彦の樣に私達の心を躍らす響だ。

一月三日、澤本、和辻、野崎、須藤、一行五人。皆んな思ひ〳〵な夢を描き乍ら九時の急行で札幌を立つ。

計畫は先づ芦別岳をやりそれから十勝へまはり、上ポロカメツトクから富良野岳へ出る積りであつたが相變らず芦別では二日とも吹雪かれたり、ベタ雪だつたりして頂上へ登る事は出來なかつたので五日皆んな氣をくさらして、翌日から十勝へ行くために上富良野へ引返し、その日は宿屋へ宿る。翌六日は皮肉にも上天氣、昭和始つて以來の天氣である。殘り惜しい樣なほッとした樣な妙な氣持で吹上溫泉へ向ふ。例の四里の馬橇道長い〳〵とこぼし乍ら今までの腹癒せに芦別岳をふり返り〳〵盛んにけなし始める。だがいゝ山はいゝ山で仕方ない。いくらけなしても〳〵治らないのは腹の虫だ。併し天氣が妙に私の心を輕くして呉れる。そして雄大な十勝連山を眺めて居る内にいつか新しい山への昂奮で芦別の事なども忘れて終ふ。

十時に上富良野の宿屋を立つたのだが途中少しのび過ぎたのか三時近くやつと事務所につく。こゝから吹上溫泉までざつと二里、桃色にグリューンして行く雪の山々を大きな〳〵タンネの林の間から眺め乍ら行くのもよい。それは默々とし

て登る十勝の煙、スキーとストックの快い音だけを大事に〳〵そつと傳へる林の靜けさ、そして桃色の然も落ちついた輝やかしい夕暮れの世界に私達を導く。やがて星も一つ、二つ、タンネの枝に輝き出す頃凡ては紫の衣に包まれて行く。そして輝やかしさから靜寂へ夜のとばりは下されて行く。

磨ぎ澄した鎌の樣な月がタンネの枝にかゝり、深い〳〵林の内に銀色の凍つた世界が開かれる頃、かすかな月の光にも友のストックのリングに雪びらは輝く。この雪だ、この雪だ。私達が十勝にひかれて來たのは、快いスキーの滑走、山、岩、氷、そしてピッケルの叫び。私の昂奮は鋭く〳〵こんな凍つた夜の世界の内にとぎすまされて行く。そしてこの腕、この股、凡ての筋肉の緊張に魂が籠つて行く、ほんとに云ふ事の出來ぬ世界だ。一日先きに來て居たMが提灯を持つて途中まで迎へに來てくれる。ほーつと柔らかに輝く提灯の灯はほんとうにうれしかつた。

六時にもう間もない頃やつと溫泉につく。親切な溫泉の人達に迎へられ懐しい去年の室に入る。ランプもストーブもみんなそのまゝだ。踵のまめが大事だと言つてスキーをひつぱつてきたSもすぐ後からついて又一層賑かになる。もう芦別もくそもない。明日は上ポロカメットクだ。懐しい十勝の懐で私達六人は深い〳〵眠に入る。

一月六日　今日もよい天氣だ。溫泉は一〇五〇米程の所にあるので上ポロカメットクまでは後八五〇米程の登りであるが途中見て來た所では一体にその邊はがけが多く風も強く富良野への尾根もまだ未知であるので、兎も角富良野岳まで相當長い尾根をスキーをトラーゲーンするのは此天候のかはりやすい冬では少し無理だと思つたので、富良野岳へは出ない事にする。實際地圖に非常に多くの誤りがあつたので思はぬ時間がかゝつた。初め上ポロカメットクの一八八七から眞東に出て居る尾根、地圖によれば岩の凄い尾根であるが、事實は北側が崖になつて居るだけで南側はゆるい斜面である。その尾根を富良野岳(一九一二)へ寄つた翁溫泉の谷から南にからんで登る積りであつたが、地圖で見ると翁溫泉から上は富良野側か十勝の側よりも急であり岩なども多いので翁溫泉の少し上の邊から北へずーと入り、この谷が最後に大きく二つに分れて居る邊りから豫定の尾根にとつつかうとした。併し實際はその澤の分れる邊は兩側とも非常に急で、左の渡らうとし

た澤などは殆んど下れない位であつたので、その澤のずつと上の北側を通り豫定の尾根の地圖にある岩の盡きた邊へ向ひ、眞横に横切つてその尾根の鞍部へ出た。豫定の尾根のすぐ北に東に走る尾根があるが、その間の澤は急に落ち込んで居り、北の方の尾根の南側一四〇〇米あたりは實にだだつ廣いものであつて、地圖は非常に違つて居る。豫定の尾根の岩のつきた邊りから眞北に直線をひき。それとこの二つの尾根の間の澤との交點あたりが兩側に割合ゆるかつたのでそこを下りた。こゝで晝食を食ひ、こゝからアイゼンをはいて尾根へとりつく。鞍部まで相當急である。尾根は中々な風だ。頂上への鞍部までコッヲが三つ、所々北側へ向つて雪庇が出來て居る。尾根が思つた程かたくなくちよい〳〵もぐり込むので弱つた。一時五十五分頂上、ざつとシーデポットから二時間かゝつた譯だ。

北海道中の山が全部見えるといつてもよい天氣だ。ニベソ、ウベベ、石狩、ヌタック、天鹽、夕張、中央高地の縮圖の展開だ。十勝へつゞく尾根の前が少し上ポロカメットクより高くその間が深く落ちて居る。西側からこの尾根を登つて十勝へ登つたら相當緊張して面白いと思ふ。登つた尾根の北側の噴氣口は盛んにふいて居たが南側のものは見當らなかつた。歸りはシーデポットと溫泉を結ぶ方向にコースをとり、途中ノビ乍ら約一時間程で溫泉についた。

【附記】登りもこの歸りのコースが一番よいだらう。去年この豫定の尾根の北側の噴氣口のある下のあたりが、即ちシーデポットの邊一体ガスのため非常に深く落ち込んで居る樣に見えたので登りの樣なコースをとつたのであるが、地圖の誤り等を知り非常に爲になつた。オキナ溫泉のある邊も北側は非常に急であつて南側が却つてゆるい。上ポロカメットクから富良野岳へ尾根傳ひをするならば是非ワカンジキが必要であると思ふ。時間等餘り書き入れなかつたので次に書いて置く。

一月六日　午前十時（上富良野發）—十二時一五分（小學校）—三時一〇分（事務所）—六時（溫泉）
一月七日　九時（溫泉發）—九時五五分（オキナ溫泉跡）—一〇時一五分（アザラシをつく）—十二時〇五分（晝食、シーデポット）
　　一時五五分（頂上）—二時五分（頂上發）—三時〇五分（シーデポット）—三時五〇分（溫泉）
一月八日　午前中雨、午後よりゲレンデスキーをやる
一月九日　溫泉發札幌へ。

冨　良　野　岳　　和　辻　廣　樹

獨逸スキークラブの練習會

Der Training kursus des Deutschen Ski Verband für Olympiade 1928.

在伯林　麻　生　武　治

獨逸体育最高委員會が來るべきアムステルダムのオリムピアドに新興獨逸國民の意氣を發揚せむ "Deutschland, Deutschland überalles, über Alles in der Welt,, ——祖國よ世界に冠たれ……この心組は官民合同の熱心さにて、陸上競技に於ては、先に Waitzer 氏指導のもとに Frankfurt a. Main に於て全國より選拔の Athletesを集めて講習があつた。

スキー聯盟幹部にあつても何で徒手して居らうぞ。Yena 大學体育顧問 Eitel 氏指揮の下に各地方團体より選ばれた者四〇人は遙諾威はテレマルケンの產 Olaysen 氏をコーチとして、去る五日より此處は Bohemia の國境 Erzgebirge の Ob. Wiesenthal にて Training を開始したのである。

Sportman Spirit や Gentlemanship を己が專賣特許の如く宣傳し、然も陰險な Politik を弄する國の人とは違つて一面識ない自分に電信まで送つて此地に呼びよせてくれた親切を自分はたとへ Sportman の端くれとしてゞも感慨なしに受けられ樣か。

一同の宿舍にあてられた獨逸トウルネルシャフトの Heim は後がタンネの森に續くなだらかな丘にあつて、自分が此地に著いた時、霧の中にあれがと指さゝれた建物を見た時 Thüringen の森ではあるが Nibelungen の Waltburg を想はせる樣な堂々たる感じを持たせた。過る大戰に利あらざりしとはいへ努力の國民が Sport に理解と喜捨を持つことを羨まずには居られない。一室二人の室割で電燈ステームヒ

ーター、ランニングウォーターの設備は伯林あたり中流以上のホテル格といつてよからう。自分は Klub Kameraden で本年墺太利の Meisterschaft を持つ Hoertnagl と同室になつた。Training の始まつたのは我々到著の翌日からであつた翌朝八時戸外の寒さを他所に一同はスポーツパンツ一つで室内体操場で卅分間徒手体操其は平均運動と手脚の關節腰を柔軟にするものであつた。之から毎朝朝食前に此体操を各々が体重を量ることを忘れなかつた。ザクセンの Ski Verband から派遣されたスポーツ專門醫が今度の Training Kurs の初と終りに我々の身体檢査を行つた。九時、我々は Fichtelberg の木立に朝日のさす窓の内に食卓についた。Training 中の朝食は Oat meal にパン小量のバタとジャムであつた。食後一時間して Fichtelberg の東北斜面にある Jungfer grundschanze に集つた。スカンヂナビア Type のすらりとした Olavsen が、先づ輕く卅五米躍んでから Verband から與へられた番號順に飛びだした。いづれも各地方 Klub 選りぬきでよこされた連中だ。卅米以上は誰も飛ぶ中にも Sprunglanf では、獨逸が誇とする老練の Kröckel, Brischek（スリチエク）其に新進若年の W. glass, Recknagel あたりは四〇米突を越すではないか。Auslauf から Ski を擔いで第二ラウンドへと Anlanf に登つてゆく途中 Kampfrichter Tribüne の下を通る時、其上にあつて、各々の Sprung を見てゐる Trainer から注意を受けて Zweite Runde に向ふ。

四〇人が三度づゝ飛ぶともう晝だ。十二時半に第二の朝食（Zweite Früstuck）をしてスープ、肉類野菜を採る。食後の休憩をして、二時には吾々は Langlauf Ski を穿いて Olavsen を中心に圓陣に集つた。脚の運び Stoch Technik の解釋をしてから氏は實際に之を示し後我々を數組に分けて近い時は六七基遠くは國境を越へてボヘミアの森を縫ひ丘を越へて十四五基から廿基米も走つた。練習の後にはシャワーバスをとつてから熱いチトロネンワッサーを飲んで晩食を待つのを常とした。午後に Langlauf をやるといふので晝食は Zweite Früstuck と名づけて少ししか喰はせないんだから Haupt mahlzeit である。夕食の待遠しいのはいづれの種目にしろ Sport をやる人の味ふところだらう。ドクターから一日の食量七千カロリーといふお振れがあつたゞけに此ハウプトマールツアイトには相當な物を食はせた食後七時半から卅分程專門醫からのマッサージの講義や

或時は Olavren の Wachs（塗臘？）についてのお話があつた。

十時が鳴れば皆床に就かねばならなかつた。其迄の時を或は蓄音器を聞く者もあり或は Olavren 氏をかこんでスカンヂナビアの話を聞いた。或時は Ober Bayern の連中のおどる Waltzer にあわせての Platten Tanzen は我々をたまらなく愉快にした。近頃流行だとか云ふ Cherlston なんていふものに比べて之はまたなんと趣のあるものだらう。手風琴につれて皮の半ズボン（Lederhosen）にティロール帽胸にはエデルワアイスの飾のついたズボン吊をして踊り出す彼等はいかにも無邪氣に而して見る者にはアルペンの麓の質朴な山村や氷河に近いたつた一軒の Zennhütte なぞを憶はせた。このたのしい集りは毎夜開かれた。

就寢前同室の Hoertnagl と自分は互にマッサージをすることを忘れなかつた。伯林の Dr. Kirchberg について實地を修めた自分と醫科を學んでゐる Hoertnagl とは相補けて互に益することが多かつた。Athletics に於てより高い結果をもたらさんとすれば此 Sportmassage は必須のものであつて、疲勞素の運搬を速進し Bindegewebe を柔にし而して神經を安靜ならしめるものである。

かうした Training が十日間續いた。午前の Sprunglauf は毎日同じであつたが、午後の Langlauf は一日強い Tempo で走れば、二日は樂に次に四日目速く走るといふ具合で、Olavsen 氏の示したプランは一週二回乃至三回走るといふことであつた。つまり初めの一週に三日練習したら次の週に二日練習する標準である。中に二日樂な日を置くことは Überanstrengung を避る爲である。Ober Wiesenthal が九百米突。近傍の丘 Keilberg や Fichtelberg がやつと千二百米突しかないんだから吾々が此處に來てから暖い日がつゞくので日一日と雪の少くなるのが心もとない。

Sachsen のスキー Verband では人夫をよこして毎日のように Aufsprungbahn に雪をかきこんでくれた。其でもとうとう一週間目には大きい Schanze は使へなくなつた Season をひかへて多忙な Schneider, Hannes が D. S. V（獨逸スキー聯盟）の懇望によつて Tirol の方を繰合せて來たのは其頃であつた。彼の意見によつて小さい Loaping Schanze が急造された。之によつて Vorlage と Landung の時の強い Druck に對して Knie Beugung を二段にやることをおぼへ

た。或時は、今はチエヒヨスロバキア領となつてしまつたWeipertに住むDickもコーチに來た。或日の午後彼の先導で七基米もはなれたKeilbergのSchanzeへでかけた。

Keilberg Schanze之はまたしても大きなものである。Wengen のJungfrau Schanze, PontresinaのBernina Schanze程はないにしてもSchanzeからAufsprungbahnの始まるTodenpunkt迄廿米突、此SchanzeのRecordはDickによつてなされた六拾二米であるによつても想像されよう。私は敢て云ふ數ある中歐のSpringerの中でSchneider, Hannes Buchberger Vincenzが現役を退いた今では彼Dick, Willy程無理のないHarmoniousなSprungをやる者があるか。獨逸人である彼がたとへ國籍はTschechoにあつても一九二八年Winter Olymp iadeにTschechoからStartすることはあるまい。H. D. W. (Haupt Deutscher Wintersport Verein in Tschecho Slovakei Republik) といふ會がF. I. S (Fédération internationale du Ski) に加入してゐれば其を代表するであらう。

獨逸スキー聯盟が大いに意氣込んだ此Training Kursも自然には勝てなかつたとは雪の少い爲に中止のやむなきに至つた日Beyerischer Ski Verband主事Riefler氏の挨拶中の言葉である。然し此拾日間に習ひ修めたことを各自が今冬練習することによつて目的は貫徹されるのであると氏は語を結んだ。

Training Kursは初めの豫定十四日間であつたが十日間で中止になつてしまつた。そうなるともう此地の用はない。Rucksackに Schi 二帳といふ身輕な旅裝は、思出の多いArlbergへといそいだ。然し去る日の朝たとへ短い日數でそれがあつたとはいへ獨墺一流のSpringerなりLäufer達と走つたBöhmen Tannen Waldを輕便鐵道の窓越しに見送る時、もう此若き日は再び來ないだらうと思ふと、たまらなく懷しくも悲しいものであつた。

——吹雪の夜アールベルグにて——

海外通信

歐洲の旅より　木原　均君

植物細胞の染色体(クロモゾーム)數の顯微鏡的觀察研究で世界の學界を驚異せしめた大研究に一段落をつけて、歸朝の迫る二、三ヶ月を利用して中歐、南歐の旅について居らるゝ木原均さんから最近次の樣なお便りがあつた。

山とスキーの會諸兄

十二月廿四日ウエンゲンに來ました。

チユリツヒでは寒い風に吹かれ急に寒國に來たやうに思ひましたが、雪の上に轉がつて遊ぶ樣になつてから、もう少し寒ければ良い位に思ひます。雨の降つた日もありますし、曇つた日が此數日續きます。

ユングフラウは僕の泊つて居る小さなホテルの窓から手にとるやうに見えます。朝眼を醒ますと寢床から頂上が見えます。之が朝起きての樂しみです。

ウエンゲンから峠を越えて向側のグリンデルワルドには槇さんその外二、三の人達が來て居ます。三度計りもう會ひました。また近日出かけます。

ホテルに居るお客の大部分は英國人です。多くは電車でクライネ・シヤイデツク近くまで上つてホテルまでスキーで上つて、ホテルまでスキーで下つて來ると云ふ樂なスキーを行つて居ります。ジャムブの競技はクリスマスと一月元日にありましたが面白いといふ程のことはありません。

ジャムパアは皆一樣のフオームの樣です。身体を屈げた人はないやうでした。此ユングフラウシャンツエはアプローチが長く百米もあるでせう。最長不倒距離五〇米内外、ラングリーメンを使つて居る人が大部分でした。

長距離競走は一度も見ません。お客樣相手故滑降競走が度々あります。

「不倒滑降競走」にカウルフィールド氏の息子さんが勝つた由、此競走の主催者がDown-hill-Only Ski-clubとは、英人の傾向を表はして面白いと思ひます。

達者な人達もチョイ〳〵見かけます。一級、二級、三級（最上級）等のテストがあります。ランとかカウルフィールド氏等が委員らしい樣子です。スラローム滑降などもテストするのです。

一九二八年のオリンピックには力瘤を入れて居ります。選手をきめてから大いに練習をやるらしい樣子です。僕のホテルの隣りにパン燒をして居る人で、スウイッツルで一流のジャムパアが居ります。カルルセンにも勝つたと云つて居ります。名はラウエナー（Lauener）今日はルーツエルンの豫選に出て行きました。パン燒だといふのが愉快ぢやありませんか。僕はそのパンを毎日たべて居る譯です。ウエンゲンは僕一人で遊び相手がないので近い中にグリンデルワルドへ移らうと思つて居ります。

——ウエンゲンにて一月九日——

此書狀と相前後して別項の書籍及びスキー地圖等の惠送を受けました。そしてホテル・エーデルワイスやら、クロステルのジャムプ臺、シャイデックのラウベルホルン、ゼンヒユッテの尾根超えのや、ユングフラウの大觀や、ウエンゲンの素晴しいジャンプや、"Gluckfahrt in Schnee,"といふスキーフィルムの引伸ばしの美しい繪葉書やらを送つて頂きました。そしてウエンゲンの例のダウンヒル・オンリー・スキークラブの競技に關する印刷物も頂きました。一寸參考までにルールを附記しませう。（編者）

競技はアマチュアー、プロフエッショナルの區別なし。

体が地上に接觸したものは轉倒と見なし計算し無資格とす。

杖に賴つてはならない。

競技者は三〇秒置きに出發する。

優勝者はカップと同型のレプリカを受ける。

* * * * *

一月二十一日グリンデルワルドより

サンモリッツのオリンピアシャツエでは計算によると、七〇米突以上飛べる相だが、先日試驗のジャムプを行つた處が二〇、二四、二七米といふ貧弱なレコードで切角緊張して期待した豫想がガラリとはづれた相である。但しその

日は雪が悪かつた。

そこでイヨ〳〵開場ジャムプ大會が一月廿日に開かれ、カルルセンの如き優秀のジャムパアが飛んだ處、同氏も最長不倒三十九米突（オーブンで四十一米）を出して一等にはなつたが、やはり七〇米以上のレコードを出さうといふ豫算は美事はづれた。勿論今後大いに手入れをして豫想通りのものとするらしい。

當日の成績は次の通り

一、ダクフイン・カルルセン　（一八點八三三）
二、ゲ・ウイロイメル　（一八點八〇五）
三、エフ・カウフマン　（一八點〇一四）

カルルセンは元氣が良い。ベルニナシャンツエで六十五米飛んだ、そこでも一等、瑞西人は力んでもやはりノールウエー人にはまだかなはぬと見える。氏は更にクロステルでも一八點五〇〇で優勝して居る。ベルニナシャンツエはボントレエヂナアにあり、サンモリッツにも近くて、若し日本から選手が來れば此處がよい落つき所だらうとは武さんの話である。

＊　＊　＊　＊

アルルベルグより　麻生武治君

手稲山のパラダイス・ヒユッテも落成し、スキー並びに登山スポーツが日一日と盛になることを喜び諸君の愛好、努力の結晶と御禮申し上げます。

選手權大會が札幌で行はれるとのこと、さぞ御多忙でせふ。ルーター氏と私は其結果を心待ちにして居ります。此寫眞は Dick が自署してくれたものでり。"Wunder des Schneeschus, II Teil のジャムプ寫眞に複寫してあります。そのオリヂナルですからお送りします。（此寫眞は第二卷第十七頁のものです。）

コルチナの國際競技、キッツビユウール（墺國）の大會ドイツバルテンキルヘンの各選手權大會、それについて行はれる同じくバルテンキルヘンでは "Winter Deutsch Kampf Spiele,, スウイスでは Chateux d' Oex の選手權大會にサンモリッツの五〇粁とオリムピアシャンツエの開場ジャムプ大會、かうやつて見るとなか〳〵プログラムが多い。小生伯林を去つて以來、木原氏からは何のお便りもないが、氏は伊太利の Rava 氏を訪問旁々コルチナに行かれ

後サンモリッツに來られる筈、自分は先にコルチナへの出場を日本の聯盟に申込んで下さいと云ひましたが、サンモリッツの五〇粁が捨て難く、兩競技は一週間の日數を間に置くのみ、その一つを取らねばなりません。そしてスポートと國際關係を一緒にはしたくありませんが、オースタリー對イタリー、イタリーのやり口はどうも切取强盜式ですチロールでコーチを受けて居る私として恩師とも云ふべき人達に背いて伊太利の大會に行かうとは思ひません。そんな譯で日本の聯盟には申譯ありませんが、コルチナへは出ますまい。今冬は槇さんも瑞西に居られるし、お伴が出來たら又冬の登山を松方、松本等と一緒にやりたいと云つて競技にも出たし、此處一寸板挾みです。いづれにしろ故國スキー界の發展と「山とスキーの會」同人諸賢の御健康を祈つて目新らしいことを聞き、新らしいことがあつたらお知らせするとしませふ。

——Ski-u. Berg Heil! Takse. Arlberg にて——

＊　＊　＊　＊

ドイツスキー團の合宿練習會の終る前日 Ob'wiesenthal (D. S. V. の Lehrwart（スキー教師?）Kursus の指導者として來られた "Der Winter,, のルーター氏の十五週年記念の御挨拶を同封します。

Sportliche grüsse und Ski Heil zum Jubiläum von Carl J. Luther-München. Luther.

＊　＊　＊　＊

在セント・ルイス　後藤一雄君

鐵砲玉のやうに横濱を出たきり便りもしなかつたやうだが、別段間違もなく此處に落ついてクリスマスもやつたし正月も迎へた。年越しのそばも食べなかつたし、正月の雜煮も祝はなかつたが、それでもやつぱり相變らず年は拾つたやうだ。

緯度は札幌よりは南でも寒さは札幌位だと思へば大した違はない。二、三日前には今迄で一番寒かつたが、それでF零下三度、雪も少しは降る。然し三、四寸が關の山、雪の降る時は大抵割合に暖かいので粉雪は降らない。よせ豆腐以上の場合が多い。何れにしたつて四方山といふものが本當に見えないんだから話しにならない。

札幌なら何處々々温泉に合宿に行くとかいふ樣な報告が來

たりスキーの寫眞が出て居たりすると傍にゐる誰でもつかまへて廻らぬ舌を無理に廻して吹き飛ばしてゐるが、それでやつと腹の虫を押へてゐる。然し日本でスキーが出來るかつて聞く奴が多いから驚くぜ。何しろ今でも日本は年中櫻の花の咲きほこつてゐる國だと思つてゐるんだから話にならない。

何としたつてアメリカはスケートの國だよ。アメリカへ來るんだつたらスキーなんかやめてスケートをやつて來るが好い。スケートならセント・ルイスだつてインドアのは十月頃から初めてゐる。そして公園のポンドだつて毎日出來るんだから大いに享樂出來る。僕はスケートは十年昔にやつたきりだから今では初める氣が少しも出ない。然し氣が向いたら初めるかも知れない。

札幌では今年は忙しいだらう今頃はね。この手紙のつく頃にはもう大會も終つて先づ一息といふ處だね。愉快な報告の來るのを今から心待ちに待つてゐる。大野先生も定めし氣をもんでゐられる事だらう　今年は何としてもスキーといふものから緣切りの狀態に置かれてゐるが、次のシーズンには何とか色がつけられるやうに今から考へてゐるがこれも文部省のご遂つてあんまり自由が利かないからどうなる事やら、四月には木原君がやつて來るといふから少し智惠を借してもらはうと思つてゐる。

スキー部の連中によろしく、大野先生にもよろしく。

――さよなら。　一雄――

元氣で活躍して居らるゝ

麻生武治君

麻生君と僕達が親しく知り合つてから、もう一年にもならうとして居る。麻生君は夏冬かけての在外唯一のスポーツマンとして今中歐で盛んに活動して居らるる。僕達は隨分と麻生君のお蔭で仕事も進めることが出來た。又今月號にも麻生君の最も樂しかつたスキー競技練習の詳細な玉稿を頂くことが出來た。ドイツが如何に一九二八年のオリンピックの準備に精進して居るか。特にスキー競技の方の練習を如何にして組み立ててやつて居るか。氏の稿を三讀して欲しい。「チロールからの練習を終へて一月中旬ウエンゲンに行つて、ウエンゲンのユングフラシャンツェで開催のジャムプ競技參加して二四米を三度不倒で第七位を捷ち得、更に一月二十日には、グリンデルワルドのホテルに滯在して居る人達の間に催された「男子の滑降競走」に參加して第一位を捷ち得優勝カップを獲得された。此コースは約六粁で標高差約一二〇〇米突でタイムは十八分四十五秒であつた。「多くは英人が競走者で、武さんの確實な滑走振りを見て大いに意を强ふし、數に於ては少いが吾々が些か優越觀を感じたといふ譯です」とは木原さんからのお便りであつた。多分その時雪の樣に眞白い地に眞紅に染め出された日章旗がスロープの上で盛んに打ち振られたことであつたでせふ。（君一生）

彙報抄錄

端西ポントレヂナのジヤムプ競技會

K・S生

ポントレヂナにあるノイエ・ベルニナシャンツエでの國際スキージヤムプ競技會に於て、ノールウエー人であるダクフイン・カルルセン氏が六十五米のレコードを作つたことは已に他の運動雜誌や新聞等で報道されて居るが、今少しく此處で詳しい記述をして見たいと思ひます。

ノイエ・ベルニナ・シャンツエの大体の構造については、已に本誌第四十年第四五號に抄錄してある通り、一九二五年に建設されたもので今その大体の大さを伺つて見ます。

アプローチ

全長　一四五米、　巾　一一米

最大傾斜（スタートの近く）　三五度

中央部新傾斜　二六度、　シャンツエ　二度、

高さ　一米八〇

着陸斜面

全長　一〇〇米　最大傾斜　三八度

アウトラン

全長　一二五米　最大巾　四五米

今度の競技會は去る日曜日に開催の豫定であつたが雪質非常に不良の爲、月曜日に開催された。

參加者はオーストリー、ポーランド、イタリー、スウィツツル等の各國選手であつた。

シャンツエは工合よく修理され、六〇米までのジヤムプは珍らしくなかつた。

ノールウエー人のダクフイン・カルルセン氏は、オーストリのウインタースポーツクラブから出場し、距離六五米の不倒ジヤムプ（その時の競技系數は一九・四六〇で）を爲した。この記錄は從來彼の作つた此シャンツエでのレコードより約二米程延びて居る。

更にその日のセニアクラスの競技成績を見るに

第一位　D. Carlsen

（一八點七二二、不倒距離四三、五九、六五米）

第二位　Eidenbenz＝St.Moritz
（一七點一九六、三七、五八、五九米）
第三位　Florian Koch＝St.Moritz（一六點二五〇）
尙ジュニアの競技も成績良好で、R. Vogel-Luzern は一七點六一〇、三三、三九、五一米で第一位を獲た。
最後に悲しいことには、此日スウィッツル人の Schlumpf 氏が六五米飛んで轉倒し、爲に右肢を折損したといふことである。氏の爲に此處で同じ道の友として遙かに同情の意を表し、快復の速かならんことを祈ります。

一九二七年度スキー ジヤムプ新記錄

已に本誌に於て嘗て發表したことのある新進の世界的ジヤムパア、ノールウエーのシグムンド・ルード君は二月十四日オスローに於て連續的に四回のスキージヤムプを爲し第一回六十二米、第二回六十五米、第三回六十八米、第四回七十二米を跳んだ由。（昭和二年二月十七日東日紙掲載）
此報道を見るに、ルード君は自分の作つた昨冬の世界レコード七〇米五〇を破つたことになる譯である。（K生）

學生スキー聯盟創立

一、全日本大學專門學校スキー競技聯盟創設

發企團体　早稲田大學スキー部
明治大學山岳部
法政大學スキー部
專修大學スキー部
東京藥學專門學校スキー部
會　長　河本慎吉氏
常任幹事　中川　新君
泉掬次郎君
鈴木信三君
聯盟本部　東京市小石川區久堅町五八

二、全關西學生スキー聯盟創設

發企校　京都龍谷大學
神戸高等商業學校
神戸關西學院
大阪醫科大學
關西大學
大阪藥學專門學校
以上山岳部及スキー部

一九二七年度
瑞西スキー選手權大會

期日　一九二八年一月廿九日—卅日

場所　Chateau d'Oex（ベルナーオーベルランドを中心にして）

一月廿八日（十八粁競走）天候良好、雪質良好。

コース。スタートは一四〇〇米の地點にあり、それから十二粁の間は特別の急登斜面なく續いて居り、その十二粁は千五〇〇米まで登り、五八〇米下り（樂な滑走）終りは僅かの反對斜面への登り、其後は滑走してゴールに入る。

成績　Senior. 18k. m.

			時	分	秒
(1)	Iklasse.	Walter Bussmann(Luzern)	1	20	33
(2)	〃	Adoli Rubi (Grindelwald)	1	20	41
(3)	〃	Otto Furrer (Zermatt)	1	21	28
(1)	Ⅱklasse.	G. Bärtchi (Adelboden)	1	25	53
(2)	〃	H. Hermann (Gstaad)	1	28	56
(1)	Ⅲklasse	R. Waampfler (Sahnenmdser)	1	26	12

Junior. (9km)

(1)		F. Julen (Zermatt)	28	19

ジャムプ競技

Senior.

(1)	Iklasse.	Hans Eideubeuz (Adelboden)	17.611
(2)	〃	Walter Glaβ (D. Klingenthal)	17.583
(3)	〃	Sepp Schmid (Adelboden)	17.444
(1)	Ⅱklasse.	A. Attenhofer (Zürich)	17.333
(1)	Ⅲklasse.	M. Gottier (Rougemont)	17.416

Junior.

(1)		Bruno Trojani (Gstaad)	17.888

最長不倒距離は54mにして Senior Klasse の Hans Eidenbenz Junior klasse の Bruno Trojani 兩君が作れり。

複合競技

(1) Walter Glass (Klingenthal ドイツスキークラブ)

ディスタンス　1時26分58秒(18km)　點數	16.75
ジャムプ競技	17.583
決定成績點	17.034

(2) Sepp Schnnid　17.034

之により W. Glass 氏は昨年の優勝者 S. Schmid 氏を凌いで1927年の瑞西スキー選手權を獲得せり。

（瑞西チュリッヒ B. Z. Mittag 紙より）

一九二七年度國際スキー競技會

競技場　イタリー國コルチナ・ド・アンペッツオ
競技會　二月三日、五日、六日
プログラム

二月二日

コルチナ市の公會堂に於て午前六時、競技者の呼集、番號抽籤、長距離競走走路の說明、五〇粁長距離參加者の身体檢査。

二月三日(五〇キロ長短離競走)

午前八時ホテル・コロナに集合、八時卅分五〇粁出發、午後九時グランドーホテル・サボイ、グランドホテル・ベレエヴエ、パークホテル・コンコルディア、カフエー・ローヤルにて舞踏會。

二月四日

午前九時競技事務所集合、競技委員及び競技者會合、Giaupass(2000m) にある "Gino Rava" 氏ヒユッテまで十分間、ケーブルカアーに乘り遠足、二時間スキー行軍、中食、コルチナの指定のホテルに向つて滑走、午後五時卅分市の公會堂にて饗宴(競技者及役員集合)

二月五日(十八キロ競走)

午前八時三〇分ホテル・コロナ集合、午前正九時十八粁競走出發、中食後午後一時三〇分委員及び競技者競技事務所集合 "Tre Croci Pass" 行(一八〇〇米)グランドホテルトレ・クロチイの管理者の饗宴、終つてコルチナへ滑走、午後九時グランドホテル・サボイ、グランドホテル・ベレヴエ、パークホテル・コンコルディア、カフエー・ローヤルにて舞踏會。

二月六日(大ジヤムプ競技)

午後十二時三〇分ドロミイテン驛に、飛型審判員、測尺係等の役員集合、大ジヤムプ場へ特別列車仕立、午後一時十分一般見物者の爲めの特別列車仕立、午後二時大ジヤムプ競技開始、終了後特別列車にて歸還、午後十時グランドホテル・サボイにて優勝者への賞品授與、終つてホテルの飲酒場で委員及競技者の解散會。後グランドホテル・サボイ、グランドホテル・ベレヴエ、パークホテル・コンコルディア、カフエー・ローヤルにて舞踏會。

H. U. S. V. 新着圖書

Das Gehen auf Eis & Schnee. von Franz Nieberl München,
その他 Berneroberland 案内書三種
Erwin Hoferer. Winteriches Bergsteigen Alpine Schilauftechnik
H. Staub & Cie. Spezial-Katalog für Winter-und Sommersport.

以上在ウエンゲン木原均氏より寄贈せらる。

ゴシップ

○僕等の新しい先生均さん事木原さんは、愈々留學研究を終へて、正に歸朝の旅について居らるゝ。五月にはもう故國の土を踏んで居らるゝ筈である。一日も早くアチラのスキー界の狀態を承りたい。之が今の僕達の心待ちにして居ることである。

○均さんが故國へお歸りになると相前後して又僕達は新しいヨウさん事岡田さん、局長さんこと酒井先生達をアチラへ送ることになる。

北大スキー部といふ一つの有機体の集りを中心にしてその有機体の中から入れ代り出代りに海外に洋行さるゝ人達の多いことは、吾々の至上の幸福と言つても良い。兎に角コチラから行かれる方々が、皆他處の人達と違つた見方でアチラのスキー界を視察して來て下さるから有難い。要するに吾々は惠まれて居るんだ。

○ロックフェラーの研究生になつて選拔されて行かれた僕達の一洲事後ちやんから悲しい便りがあつた。スキーが思ふ存分出來ないとは同情せざるを得ない。

○アメリカへ渡つた人と歐洲へ渡つた人とのお便りの相違は手紙の文句で判る。一つは「さよなら」一つは「シーハイル」又は「ベルグ・ウント・シーハイル」と來る。

○アサヒスポーツ邊りによくアメリカやカナダのスキーの寫眞が出て居るが、日本のスキーを余り良く知らない處を見ると未だアメリカ全國にはスキーなるものが解せられて居ないらしい。尤もカナダのモントリオール邊では盛なことは事實らしい

○此次に吾等の有機体からアチラへ行くのは、何と云つても現役の連中の番にならなくては嘘だ。

編輯後記

もう三月の暖かさを雪の上に快く味ふ頃となつてしまつた。そして最早なつかしい冬とも別れなければならないかと思ふと何かしら淋しさを感ずる。

茲に一言お詫をしなければならないことがある。前號「遠距離飛躍とその力學」の譯者の姓名を不注意にも間違つてしまひ譯者青木信三君には何とも申わけがない。右は青木信三氏と御訂正を願ひたい。尙本號にはつい原稿が間に合はずあの續稿が次號へまわることになり殘念なこと丶思ふ。

本號よりの表紙は坂本直行君が特に本誌のために腕を振つて下さつた木版畫である。原圖の氣分の製版に出ないのは甚だ惜しいことである。(健生)

屈して呼氣を爲すやうになる。

杖にのみで前進する場合は、同樣の要領で杖を突く時呼氣をなすべきは勿論である。体を起して次の一突きをやらうとする時は、充分に吸ひ込んで眼前の傾斜地に注意を拂はなければならない。杖を使用する事なしに滑降出來る時は、もう可成傾斜の强い下降面である。此の時は餘り体を前屈し過ぎないやうにして大きく深呼吸しながら滑降して行くがよい。出來るだけ酸素を吸收して、次の平地或は登りの時に對する準備として充分なる英氣を養ふ積りで、腕や脚の休息期にも呼吸は大いに注意を拂つておくのである。

登行の時の呼吸は三段滑走をやつて居る間は、平地の時と變りがない。唯脚の運動が多くなり上体起立期が長くなるので、前屈期に一致する呼氣をやる場合は少し稀れになる傾向がある。斜面が急になると上体の前屈は殆ど無くなる。從つて特別に呼氣と上体運動を一致させる必要はなくなる。出來るだけ大きく充分な呼吸を爲すがよい。唯呼吸が次第に苦しくなり、且脚の運動が鈍り勝ちになつた時、强い吸氣と山側の脚の速やかな前進、强い呼氣と谷側の脚の前進をそれぞれ一致させるやうにするやうな要領、即ち一歩前出と一吸氣、或は一呼氣を一所にやつて進む方法を取るがよいと思ふ。殊に部分的ラストヘビーを掛ける場合に此の方法が有効に使はれると思ふ。腕の運動と呼吸とにうまく調和を與へる事が肝要である。大体上述のやうな方針で私は疾走中の呼吸をやつて居るが、之で滑走中呼吸が負けてしまふ事は殆ど無い。相當平地で努力しても次の登りに差支へる程の事もなく、又登りの苦しい呼吸も降り終つて次の平地又は登りまでには驚く程平靜になつて行く。

競走練習者は登山の時呼吸に惱む事は殆ど無い。平常の疾走の練習は困難と思はれる登山も極めて容易に終らせてくれるのである。之に反し練習不足の人、又は一週間振りの登山等をやる場合には、胸の苦しさが訴へたくなるものである。此の時早速疾走の場合の方法に準ずる呼吸法を考へてやつたならば、確かに幾分の効果が得られるに相違ない。リユツクサツクで胸を締められて居る場合にもやはり大略同樣の要領に從つて歩を進めて、比較的樂な登行を爲し得られる。

4

此處に注意すべきは上体の前屈姿勢は、呼吸運動に極めて不便な姿勢である事である。三段滑走の注意文言中に「杖の先端が足部に近づく迄は前踞みになり……足側を過ぎる頃合から背中を深く丸め……」(本誌五年目、三〇〇頁高橋氏記事參照)とまで稱へられる程であるが、此の前踞みになつて背中を丸める時程呼吸運動の妨げになる姿勢は少い。充分な呼吸の出來ない事は明かであつて、唯息を吐く事が出來るばかりである。

身体の前屈期には呼氣のみが可能である。且つ背中を丸めるやうな姿勢は呼氣に最も適した姿勢である事は誰人も了解される事と思ふ。それで三段滑走の上体前屈期には出來るだけの呼氣を爲す事から、三段滑走呼吸法の基礎を作り上げて行かなければならない。

以上の基本的呼氣法に從つて呼吸するとすれば、上体の起立期に充分なる吸氣をやつて、前屈期にすつかり吐き出す方法が最も良い事になる。私は之を少し變へて、起立期に大きな吸氣と、小さな呼氣、次に小さな吸氣をやつて、前屈期に大きな呼氣で前に吸ひ込んだ空氣を、全部肺から壓出するやうにして、呼吸して居る。

胸廓は爲めに擴張期と收縮期を廣く別つて考へられる程に、上体起立期に胸を出來るだけ膨らすやうにし、前屈期にすつかり吐き出して胸を充分縮めてしまふ。

疾走(三段滑走)中時々こんな氣持を呼び起して、呼吸を整理しながら走ると良いと思ふ。確かに合理的であると共に、全動作に伴つて行はれる規則的律動は一つ一つの階段を形作るやうな氣がして、腕や脚の疲勞を感ずる事が少い。又胸の苦しさも大變輕くなるやうに覺える。

こんな注意を拂はないで走つて居る人でも、知らぬ間にかゝる調和した呼吸法をやつて居る人も少くないと思はれるけれども、更に自ら進んで注意を時に拂ふやうにしたら一層工合がよいと思はれる。猶滑走地の地形や雪又は個人的にも、呼吸法は幾分の相違はまぬがれまいが、要するに根本的見解は前屈期は呼氣に、起立期は胸の擴張に一致せしむる事に外ならない事と思ふ。

二段滑走の時は体の前屈が早く進んで、起立期が一歩だけ少い。從つて要領は殆んど狹義の三段滑走の時と同樣であるが、唯起立期が短くなる爲呼吸回數が少くなる傾向がある。第一歩目に吸つて、第二歩目(同時に杖を突く時)に体は前

同の疾走往復にも耐え、二三日前とは別人の如く強くなつた樣を見せる事がある之等も立派に身体がスキー運動に短時日の間に準應してしまつた證據である。

之等の事柄はスキー家の筋肉や心臓が數日の間に、表面に表はれて居る程の効果の差を以て、力を增したり太くなつた爲では無い。寧ろ微妙な神經作用がより大なる影響を與へ、その爲に廣義の力が增大して、スキーに適した身体を作りあげたものと觀察せられる。即ちスキー家の身体はスキー運動に適應したのである兩者がよく調和した狀態にあるのである。

スキー家とスキー運動の調和は色々の方面に見出す事が出來るが、今此處に述べようとする呼吸法とスキー運動との調和の一端は、相當重要視すべき價値ある事と思ふ。又僅かの注意でその目的に沿ふ事が出來るらしい。その實際的應用は直ぐにディスタンスレースにぶつかつて來る。

スキー競走に於ける呼吸は、スキー競走は降り、平地、登りの三斜面で行はれる關係上、呼吸法にも三つの相異がある。一言して登りは苦しく、降りは樂で、平地は兩者の中間で中等度に苦しい。即ち呼吸は登りに最も激しく行はれ平時一分間二〇前後の呼吸數が五〇以上百近くにもなる。降りは呼吸は休息の時期で絶えず靜まりつゝある狀態になつて次に平地では五〇回前後の中等度を示して居る

此の各種斜面滑走中、呼吸に最も注意すべき場合、又は特殊の呼吸を爲すべき場合は緩斜面の登りと降り、及び平地に於てであると思ふ。即ちかゝる斜面の滑走法には私は三段滑走或は二段滑走、又はその變型（杖のみによる推進法も含めらる）を使用する事が多い。（本誌六十五號筆者稿參照）此の廣義の三段滑走なる走法は陸上のランニグン等に比しても特殊の体の姿勢が週期的に表はれて來る關係上、特殊の呼吸法を必要とするのである。之には二つの特別な姿勢が繰返される。

第一　脚運動（体は概して起立の姿勢を取る）が交互に行はれる。又は全然脚の進退運動を欠く。

第二　脚運動が主なる力となつて、兩杖が同時に仕事を爲す。上体は之に伴つて前屈する。

即ち此の二別せられる体の姿勢は（一）上体の起立期と、（二）前屈期に分つ事が出來る。

スキーテクニツクの研究

調和せる呼吸法

岡村源太郎

Dr. Knoll 氏の Ski wettlänfer よりヒントを得て、從來スキー競走中或はその練習中には相當の注意を拂つて來たが、餘り經驗にまとまりが付いて居なかつた本誌の六十六號に同輩山口君が Knoll 氏の研究を譯述せられて居たのを機會としその實際に就いて少しく立入つた見解を述べて見よう。つまらぬ私の注意の一端であるが一般スキー家殊にデイスタンスレーサーの御批判を仰ぎたい。

スキーを初めて履いて滑走し出した時、或は長い夏のスキー休止より初雪の上で急に滑つたやうな時に、我々の心臓は著しく作用を高めて居るのに氣が付く。輕い呼吸困難を起し、未だスキーに慣れて居らぬ身体がスキー運動を支配する爲には、いさゝか薄弱な事を感ぜしめられる。如何なる理由よりして薄弱か、此の問題はそう一概に述べ盡される事ではないが、要するに練習が足らないのである不足な練習或はシーズン終了後よりの長い練習休止の爲め、スキー家はスキー運動に對して充分な準備を整へて居らない。突然のスキー運動にぶつかつて、驚いて必要以上の仕事にスキー家の心臓は徒勞し、みぢめな呼吸狀態を呈して居る。

こんなスキーに不慣れの狀態にあつたスキー家は、一週間の後には知らず〳〵ぬ間にスキー家として適應した身体を形作るやうになる。必要な身体の場所へ上手に心臓血管神經は血液を送つて、スキー運動と呼吸筋の運動はよく調和を保ち一つの坂を登るにも前のやうに胸をどきどきさせなくてもよくなる。以前には短いスロープの上に立つても途中百數十の脈搏を數へて休まなければならなかつたのが、數日後には數百米の登山をしても平氣で居られるやうになる。二三日前にスロープを走り上つて來て、苦しさの余りぶつ倒れた選手が（夏のトレイニング或は他のスポーツで强健な心臓や肺を有して居る人でも）今日そのスロープの數

第二回畜産工藝博覽會ニ於テ

一等賞金牌受領

登山靴とスキー靴

東京市本郷區四丁目角

太田屋靴店

電話小石川四七一二番

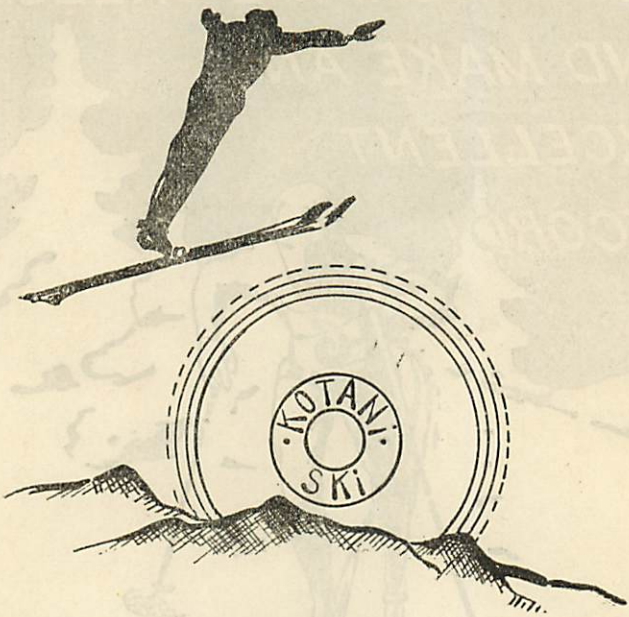
振替東京六一二七番

自信ある本年度製作品

優秀ナルトーキス其用具

小樽

梅屋運動具店



ウインタースポーツ用具
優秀な評定を受けた弊店の

札幌市

小谷運動具店

南一條

◆山とスキーの會は北海道帝國大學文武會スキー部の有志が、此の雜誌を發行する爲に作つてゐる會です。

◆スキーを研究せられる人、登山に趣味を持たれる方が一人でも多くお讀み下さることをお願ひいたします。

◆山岳及びスキーに關して何なりとも御寄稿下されんことをお願します又印畫の御惠送を切望致します。原稿紙は御申越次第お送り致します。

◆原稿は、、。を一字とし、行を更めるときは一字下げること。

◆記事中の數量は全て、C. G. S. 系によられん事を望みます。

◆雜誌代金に就て一應下記の諸項を御承知下さい。

◆本會より發する電信略號を「ヤマ」として居ります。

◆前金切れの時の御知らせは最後の分の包裝中に同封して御送りします。次の御送金あるまでは配本を見合せます。

定價 金參拾錢

*前金御申込か、現金でなければお渡しいたしません。

*御送金はなるべく振替にてお願致します。

*六冊分前金拂込の方には送料を頂きません

*前金の切れた時の御知らせは最後の分の包裝中に同封して御送りします。次の御送金あるまで配本を見合せます。

*本誌は營利的の刊行物ではありません。紹介、緣故の有無にかゝはらず雜誌の代價は頂きます。

昭和二年二月廿八日印刷
昭和二年三月一日發行
（毎月一回一日發行）

編輯者　山口健兒
印刷兼發行者　廣田戸七郎
北海道札幌市北一條西二丁目
印刷所　札幌印刷株式會社
北海道札幌市北五條西十一丁目二番地
發行所　山とスキーの會
振替口座小樽八四九五番

La Gazeto
de la
Monta kaj Skia Klubo
No. 70. Marto 1927. Sapporo. Japanujo.

大正十二年七月二十七日第三種郵便物認可
昭和二年二月廿八日印刷納本
昭和二年三月一日發行

美滿津製冬季運動具！

——型錄進呈——

TOKYO 合名會社 HONGO
東京帝國商會
東京・本郷 赤門前・電話・小石川・八四五・二〇二一・番

山とスキー 第七十號

定價金參拾錢